

[研究会報告]

第 35 回国際小児保健研究会報告

中野 貴司 (世話人) 1)

- 1) 国立病院機構三重病院小児科
(現 川崎医科大学小児科)

1. 小児科医のキャリアとしての“国際”

第 35 回 JICHA 研究会は、2009 年 4 月 18 日 (土) に第 112 回日本小児科学会学術集会の会期中に奈良で開催された。本研究会のテーマは、それぞれ異なる分野で活動する演者に自らの経験を紹介してもらった上で、会場参加者とともにも今後国際保健分野でのキャリアアップを目指す小児科医たちと情報の共有、進路の考察と討論を行うこととした。研究会のプログラムは下記の通りで、世話人は窪田祥吾、木平健太郎、堀浩樹、中野が担当した。

A. ケースカンファレンス

「途上国の村で出会ったこの子の病気、診断と治療、そして予防策は？」

(WHO 予防接種担当医務官 遠田耕平)

B. シンポジウム“国際保健を志す小児科医の進路選択は？”

- (1) 国際保健医療のお仕事 (大阪大学 人間科学研究科 中村安秀)
- (2) 病院小児科勤務医 26 年 (国立病院機構三重病院 小児科 中野貴司)
- (3) 私が国連機関に入るまで、そして入ってから (WHO 予防接種担当医務官 遠田耕平)

会場が溢れるほどのたくさんの参加者があり、活発な意見交換が行われた有意義な研究会であった。演者の一人である中野の発表を以下に報告する。

2. 地球に住む子どもたちを感染症から守るために・・・

(1) 医師免許取得後 3 年半でアフリカへ赴任

初めての海外への赴任は 1987 年 2 月、大西洋ギニア湾に面したガーナ共和国にある野口記念医学研究所であった。本研究所で展開されていた国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency, JICA ; 現在は“独立行政法人国際協力機構”) のプロジェクトで、2 年間の技術協力を行なうことが与えられた任務であった。当時私は医師免許を取得して 3 年半、小児科医としての一般研修も修了していない 28 歳であった。そんな若輩者が海外で働ける機会を得ることが出来たのは、小児科医の「国際協力」がまだ一般的ではなく他の希望者と競合しなかったことと、当時所属していた三重大学の小児科学教室が「国際協力」に目を向けてくれていたおかげであり、いくつかの幸運が重なったと感謝している。途上国での医療事情を十分に理解していたわけではなく、「アフリカの子どもたちはどんな病気で苦労しているのだろう。自分の目で確かめ、何が出来るのかを考えてみたい」という程度の漠然とした思いを胸に日本を発った記憶がある。生後 7 か月の長女と妻が

半年後に合流し、ガーナの地で1年半の間一緒に暮らした。

(2) ガーナでの毎日

人口数千人規模の村をフィールド活動の場としていくつか選び、現地のスタッフと巡回した。マラリア、コレラ、腸チフスなど、日本では稀な疾患の子どもたちとも多く遭遇した。子どもだけでなく、多くの人々が感染症で命を落としていくことを目の当たりにした。暮らすうちに、日本の医師免許を持つ自分も世界の子どもたちにしてあげられることがあるのではと考えるようになった。日常業務のみならず、アフリカ大陸での生活は大いなる興奮であった。何が刺激的であったのかをうまく表現することはできないが、毎日の時の流れそのものを味わっている実感があった。チョコレートの枕詞くらいにしか思っていなかったガーナという国は、それ以来私にとって地球儀の中でひととき大きな意味を持つ国となった。

(3) 「帰国したら別の暮らし」ではなかった

ガーナ滞在中に赤痢には罹ったが、任期を終えて無事帰国し、大学で血液疾患や悪性腫瘍児の診療が日常業務となった。帰国当初は「ラッキーで体験することが出来た貴重な2年間は終了、ここからまた別の暮らし」と、アフリカの経験と日本での小児科医生活は全く切り離して考えていた。ところが、例えば骨髄移植後の患児と途上国における低栄養・慢性下痢やエイズ患者との間には免疫不全という共通病態があり、同じ感染症に悩まされるなど、共通点も多いことに気付いた。

(4) 地域医療のノウハウも途上国にあり

三重県は南北に細長い。人口分布には地域差があり、過疎地と呼ばれる場所が多く存在する。医師として年数を経るうちに、「地域医療のノウハウの原点は途上国にあり、あるいは途上国での医療をどのように展開するかは秘訣は地域医療にあり」と考えるようになった。すなわち、いろんな意味において途上国での経験は国内でも活かすことが出来る。そして自分は、「小児」「感染」「国際」というキーワードのもとに今後の医師生活を送ろうと考えるようになった。

(5) 中国ポリオ対策プロジェクト

天然痘根絶に次ぐ一大プロジェクト「ポリオ根絶計画」にはそれまでもいろいろな形で関わっていたが、1995年12月、中国へ単身赴任し1年間暮らしたのは37歳の頃であった。東アジア地域からのポリオ排除最終段階において、中国/ミャンマー国境でサーベイランス強化とワクチン普及に携われたことは、グローバルな感染症対策を現場で経験できる素晴らしい機会となった。「世界」や「地球」が本当に身近な存在であると思うことができた。

(6) まだまだ先輩面はできないけれど・・・

自分自身は「キャリアとしての国際保健」を語れるような小児科医にはまだまだ程遠いが、これから担う若い世代の皆さんへの思いをいくつか記載する。

① “いろんな世界で暮らしてみることは大切です。そして、どこでも勝負できる得意技を身につけてください。日本では秀才だが、外国では物静か・・・では寂しいです。また逆に、海外ではやたら威勢が良いが国内ではダンマリ・・・というのも考えものです。”

② “自分の仕事は、論文化するなど必ず形に残しましょう。評価の高い医学誌なら抜群ですが、地味な日本語でもいいから、後に証しとして引用できるものを作っておきましょう。魅力ある語り部にはなかなかかなれません。客観的な証拠はやはり文章です。”